

『大阿弥陀経』 訳注 (六)

辛 嶋 静 志

はじめに

今回訳出したのは、『大阿弥陀経』下巻、大正蔵第12巻、309c19-311b13の部分である。この部分には、阿弥陀仏国に往生する人々が、その修行や徳行により、第一輩（上輩）・第二輩（中輩）・第三輩（下輩）の三種に分かれることが説かれている。

第一輩の人々は、出家して、沙門になり、菩薩行を行い、六波羅蜜を實踐し、戒律を守り、ひたすら阿弥陀仏国に生まれることを願う。彼らは、寿命が尽きると、阿弥陀仏に迎えられて、その仏国に生まれ、不退転の菩薩になる、という（309c23-310a14）。

第二輩の人々は、出家はしないが、布施をし、沙門たちに食事を与え、仏塔を建て、花や香で供養し、在家の戒を守りつつ、阿弥陀仏国に生まれることを願う。彼らは、寿命が尽きると、阿弥陀仏の化身に導かれ、その仏国に生まれる、という（310a15-25）。

第三輩の人々は、阿弥陀仏の国に生まれたいと願いつつも、布施や供養ができない。しかし、彼らが齋戒をまもり、十日十夜、一心に阿弥陀仏国に生まれることを念ずれば、その仏国に生まれる、という（310c10-16）。

同様に、梵本なども、三輩に分類しているが（香川 1984：248-253を参照）、本経・『平等覚経』とは内容的に異なる。まず、梵本・『如来会』は、「阿弥陀仏を念じ、多くの善根を植える人々」・「阿弥陀仏をひたすら念じたり多くの善根を植えたりはしないが、阿弥陀仏国に心を向ける人々」・「十念あるいはたとえ一念でも、阿弥陀仏を念じその国に生まれたいと思う人々」の三輩に分けている。それに対し、『無量寿経』は（272b15-10）、上輩・中輩に関しては、『大阿弥陀経』と軌を一にし、訳語も踏襲しているが、下輩は梵本・『如来会』と一致する。

しかし、本経・『平等覚経』が、その他のテキストと大きく異なるのは、第二輩と

第三輩のそれぞれの説明の後に、他にはない次の様な特例を詳しく述べている点である。すなわち、第二輩と第三輩の人々の中で阿弥陀仏国の存在を信じなくなった者は、それでも臨終の際、懺悔することで阿弥陀仏国に生まれるが、阿弥陀仏の許へすぐには行けず、仏国の端にある七宝の城（いわゆる「疑城胎宮」）で五百年を過ごした後、やっと阿弥陀仏の許へ行くことができる、という（310a25-c9；310c16-311a10）。

これら三輩に関する長い記述の後に、阿弥陀仏国に生まれた者は、やがて不退転の菩薩となって、三十二相・八十種好と金色の肌をもち、さらに他方仏となってゆくといい（これは他の諸本にも対応する記述がある。香川 1984：278-281）、「遅い早いの違いはあるが、到達点はみな同じ。たゆまずさとりを求め続ければ、その願いに違わず、必ず到達できるはずだ」というすばらしい言葉で締め括られている（311a10-17）。

その後に、再び、本経・『平等覚経』にだけある記述がつづく。釈尊は阿逸菩薩と神々と人々にいう。「阿弥陀仏国に生まれたい者は、少なくとも十善を行え。そして八斎戒をまもり、十日十夜、阿弥陀仏国に生まれたいと念じれば、私（釈尊！）が哀れんで、みなを阿弥陀仏国に生まれさせる。」と（311a18-b2）。またさらに、「家族と一緒にいると、情愛にしばられ、家庭内の事柄に追われ、八斎戒をする暇もなく、十日十夜も阿弥陀仏国を念ずる余裕はない。一日一夜だけでも雑念を捨て、愛欲を断ち、斎戒をまもり、阿弥陀仏国に生まれたいと念じれば、そこに往生できる」ともいう（311b3-13）。この部分は、明らかに第三輩の補足的説明になっていて、「十日十夜」が無理なら「一日一夜」でもと、往生の条件を緩めた記述である。この緩和がさらに進むと『無量寿経』・梵本・『如来会』などの様に「十念あるいはたとえ一念でも」となるのである。従って、ここの部分を「五悪段」の一部と考える（香川 1984：301, 303）のは誤り。

上に見たように、本経とそれを踏襲した『平等覚経』には、『無量寿経』・梵本・『如来会』などにはない特異な記述が長々と見られる。しかし、この部分やこの後に続く「三毒・五悪段」が、果たして漢訳者が勝手に付加したものか否かを判断するのは難しい。古い伝承が早い時期に枝分かれし、独自の発展を遂げ、例えばコータン地方で梵語に通じた僧によってこれらの部分が加筆された可能性は十分に考えられるからである。

底本には高麗蔵所収本を用いた。『中華大蔵経』第9巻では、『大阿弥陀経』上巻は金蔵広勝寺本が底本として影印されているが、下巻は高麗蔵本が底本になっている。従って、金蔵の読みは確かめられなかった。なお、下巻からは、宮内庁書陵部所蔵宋

版の読みも参考にした。

和 訳

（大正蔵第12巻，309c19-311b13）

『仏説阿彌陀經』巻下¹⁾

呉，月支国居士，支謙訳²⁾

（三 輩）

³⁾ 仏は阿逸菩薩に仰った。

「世間の人々，あるいは善男子・善女人で，阿彌陀仏の国に生まれたいと願う者は，三種に分かれ，行う徳が大から小まで異なるのである。」

（第一輩）

仏は仰った。

「三種とは何か。第一種，最上の人々たちは，⁴⁾ 家を出て，家族を捨て，愛欲を断つて，沙門になって⁵⁾，無為（＝涅槃）への道を取り⁶⁾，菩薩としての修行をなし，六つの波羅蜜の教え⁷⁾をおしただいて実行する者たちである。沙門になって，教えに基づく戒⁸⁾を破らず，慈しみの心をいだいて精進し，怒りを抱かず，(310a) 女性と交わること⁹⁾もなく，きちんと齋戒¹⁰⁾をまもり，欲望をもたず，阿彌陀仏国に生

1) 佛説阿彌陀經巻下 房山石経本は「***（破損で不明）度人道經巻下」とする。

2) 呉，月支国居士，支謙譯 宮内庁書陵部本・磧砂蔵本は「呉月氏謙譯」とし，房山石経本・元版・明版は「呉月氏優婆塞支謙譯」とする。本經の訳者に関しては，議論がある。著者は本經の訳注作成と並行して，数年来，支婁迦讖訳『道行般若經』・支謙訳『大明度經』の研究を進めている。それらと本經・『平等覺經』の訳語・文体などを比較して考察し，本經は支婁迦讖訳の可能性が高いという結論に達した。そして『平等覺經』こそ支謙訳と考えられる。香川 1993：17ff.; Paul Harrison, "Women in the Pure Land: Some Reflections on the Textual Sources," in: *Journal of Indian Philosophy* 26 (1998), pp. 556-557を参照。

3) 以下の部分，諸本との対照は，香川 1984：248-249を参照。本經と『平等覺經』以外は簡潔。

4) 以下の部分，第七願（『無量壽經』の第十九願に対応する）が成就した様を描いている。

5) 行作 類義語を重ねた表現であろう。訳注（一）注（6）を参照。

6) 無爲之道 「無爲」は『老子』の中心思想であり，人為を働かすことをやめることを指し，道家の理想の境地。仏教では，*nirvāṇa*（涅槃）や *asamskṛta*（因果による生成を超えたもの）の訳語に使われる。訳注（五）注（58）を参照。「道」はここでは，「覚りあるいは涅槃へいたる道，修行」の意味。訳注（一）注（23）を参照。

7) 六波羅蜜經 「經」が「經典」ではなく「教え」の意味であることは，訳注（一）注（19）を見よ。

8) 經戒 訳注（一）注（19）および Krsh (1998). 228を参照。

まれることを心から願ひ、絶えまなくひたすら（阿彌陀仏を）思念すれば、その人たちはこの世で道を求めているとき、横になって休んでいると、夢の中で阿彌陀仏と菩薩・阿羅漢を見る¹¹⁾。その人たちの寿命が尽きようとするときに、阿彌陀仏は菩薩・阿羅漢と大挙して¹²⁾ 迎えに飛んでくる。そのまま阿彌陀仏国に生まれ、七宝でできた池（に生える）蓮の花のなかにすつと生じ、すぐさま自然に身体を得る。成長すると不退転の菩薩¹³⁾ になり、すぐさま¹⁴⁾（他の）菩薩たちと一緒に大挙して¹⁵⁾ 八方上下の無数の仏を供養しに飛んで行く。すぐに智慧と勇敢さを得、教え¹⁶⁾ を聴くことを楽しみ、（聴けば）大喜びする。（彼らが）住む七宝でできた住居は空中に浮かんでいて、すべて自由自在、彼らの思うがままであり¹⁷⁾、阿彌陀仏からも近い¹⁸⁾。」

仏は仰った。

「阿彌陀仏国に生まれようと思う者は、精進し、教えに基づく戒¹⁹⁾ をたもつべきだ。

9) 交通 「性交する」の意味。HD. 2. 336aには『百喻経』の例が、またHu. 141には『論衡』や支婁迦讖訳『遺日摩尼宝経』の例が挙げられている。

10) 齋戒 「齋戒」に関して、訳注（一）注（60）では、梵行（*brahmacarya*）の意味で使われていると考えたが、もう少しひろく「八斎戒」の意味と考えた方が妥当かもしれない。「八斎戒」とは、在家の男女が、六斎日（八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日）に一日だけ出家生活にならって守る八つの戒め。在家の五戒の不邪淫戒を不淫戒とし、さらに装身・化粧をしない、歌舞を見たり聞いたりしない、ベッドに寝ない、昼をすぎて食事をしない、の三つを加えたもの。

11) 自然於其臥止夢中見阿彌陀佛及諸菩薩・阿羅漢 第二輩に関して「亦復於臥止夢中見阿彌陀佛」（310a22）、また第三輩に関して「阿彌陀佛即令其人於臥止夢中見阿彌陀佛土」（310c21）と類似の表現が出る。ここの「自然」はしっくりこない。おそらく「然」は衍字。「臥止」は辞書に採られていない。なお、『平等覚経』は「自於其臥睡中夢見無量清淨佛及諸菩薩・阿羅漢」（291c22）と改めている。

12) 翻輩 高麗蔵には「翻」とあり、大正蔵は正字の「翻」に改めている。『平等覚経』も同様（291c25）。しかし、本経の宮内庁書陵部本・資福蔵本・磧砂蔵本などには「翻輩」とある。すでに、訳注（四）注（13）で述べたように、「翻輩」は「𪛗輩」（*bàn bèi*）の訛で、「群をなして」「大挙して」「大勢で」の意味で使われていると考えられる。この表現はすぐ後にも出る。注（15）参照。

13) 阿惟越致菩薩 訳注（一）注（66）参照。

14) 便即 類義字を重ねた表現。魏晉以降の外典と仏典に類出する。Zhu 127；柳士鎮『魏晉南北朝歴史語法』南京、1992（南京大学出版社）、p. 233；Krsh（1998）. 23を参照。

15) 翻輩 高麗蔵の「𪛗輩」を大正蔵は正字の「翻輩」に改めている。『平等覚経』は「番（*v. ll.* 翻；幡）輩」（291c28）。注（12）参照。

16) 經道 訳注（一）注（4）、（19）を参照。

17) 所居七寶舍宅在虛空中，恣隨其意，在所欲作爲 すでに見たように、阿彌陀仏国の菩薩・阿羅漢の住まいには優劣があり、それは前世に積んだ徳の多少を反映しているという（308a20f.；訳注〔五〕、pp. 86-87）。優れた住まいに関して、「諸菩薩、阿羅漢所居七寶舍宅中，有在虛空中者，……中有欲令舍宅在虛空中者，舍宅即在虛空中，皆自然隨意，在所欲作爲」（308a20f.）とあるのを参照。「恣隨其意」は「隨意」を引き延ばした表現。「恣隨」は同義字を重ねた語。辞書に採られていないが、仏典にはしばしば見える。「在所欲～」は「在所～」と同じく「自在に～する」の意味。訳注（五）注（5）、（63）を参照。

18) 去阿彌陀佛近 第二輩、第三輩の住まいは、阿彌陀仏から遠いという。「復去阿彌陀佛甚大遠，不能得近附阿彌陀佛」（310b29f.）；「復去阿彌陀佛大遠，不能得近附阿彌陀佛」（311a3f.）。

このようなすぐれた法をおしいたいて実行すれば²⁰⁾、阿弥陀仏の国に生まれ、多くの人々からも尊敬される²¹⁾。以上が、第一種、最上の人々である。』

(第二輩)

²²⁾ 仏は仰った。

『²³⁾ 中級の人々とは(次の様である)。人々が、阿弥陀仏の国に生まれたいと願うならば、たとえ家を出て、家族を捨て、愛欲を断って、沙門になることができなくても、教えに基づく戒をきちんと²⁴⁾ 守り、大いに²⁵⁾ 布施をして²⁶⁾、奥深い仏の教えの言葉²⁷⁾ を常に²⁸⁾ 信じ受け入れ²⁹⁾、まごころと誠実さを実践し³⁰⁾、沙門たちに食事を与え、仏塔を建て³¹⁾、花を散らし、香を焚き、灯火を燃やし、様々な綾絹を(塔に)懸けるべきだ。このような法(を行う者)が、好き嫌いをなくし³²⁾、怒りを抱

19) 經戒 注(8)を参照。

20) 奉行如是上法者 「如是上法」は「上述のような法」かも知れない。

21) 可得爲衆所尊敬 「可得」は類義字を重ねた表現。仏典以前の古典から見える。GY. 213には『孟子』などの例が挙げられている。

22) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984:250-251を参照。

23) 以下の部分、第六願(301b21f.)を参照。

24) 無得虧失 「虧失」は同義字を重ねた語。HD. 8. 851bには『北齊書』『隋書』などの例が挙げられている。

25) 益 「ますます」ではなく「大いに」の意味。訳注(三)注(51)を参照。

26) 分檀布施 「檀を分け、施しをほどこす」「檀」は *dāna* (“施し”)の音写。従って「分檀」と「布施」は同義。訳注(一)注(58)を参照。「分檀」を *pinḍadāna* (団子を[先祖靈に]捧げること)の音写とする新説があるが、この梵語は仏典での出例がなく、また文脈上も合致しない。また音韻上も相応しくない。

27) 佛經語 「佛經語」ないし「經語」は本經に度々出る。「當信受佛經語」(311a27)、「不信經語」(312b26)、「其有信受佛經語深」(312c20)、「我曹聽經語、皆心貫之」(312c28)、「我曹聽佛經語、莫不慈心歡喜踊躍開解者」(313a2)、「不信佛經語」(315a10)、「得佛經語、熟思惟之」(315b27)、「其有得佛經語、悉持思之」(316a7)。「經」が「經典」ではなく「教え」の意味であることは、訳注(一)注(19)を見よ。

28) 常 宮内庁書陵部本、房山石經本を含め確認したすべての版本にこうあるが、おそらく「當」の誤り。『平等覺經』の明版のみ「當」にする(292a8)。「當」「常」「尚」の交替に関しては、訳注(一)注(101)を見よ。後に「當作孝順、當作至誠忠信、當信受佛經語深、當信作善後世得其福」(311a26f.)とあるのを参照。

29) 信受 支婁迦讖訳から見える表現。Krsh (2001). 308を参照。

30) 當作至誠中信 『平等覺經』は「……忠信」にする(292a8)。「中」は「忠」に通じる。本經も他の箇所では「忠信」にしている。「當作孝順、當作至誠忠信、當信受佛經語」(311a26)、「至誠忠信、得道絶去」(315c13)。

31) 作佛寺起塔 すでに訳注(一)注(59)で述べたように、「佛寺」は *vihāra* (“精舎”)の訳語の可能性が全くないわけではないが、おそらく *stūpa* の漢訳語であろう。従って「起塔」と「作佛寺」は同義。Krsh (1998). 151「佛寺」(*tathāgata-caitya*)、同149「佛神寺」(*tathāgata-caitya*)なども参照。『平等覺經』はこのまま(292a9)、『無量壽經』は「起立塔像」(272b-3)に変えている。他の諸本には対応する文がない。

32) 適莫 「好むことと憎むこと」あるいは「人に対して親切であったり不親切であること」。訳注(一)注(108)を参照。Hu. 130は「恋慕う」と解釈しているが、間違い。『平等覺經』は「適貪」と誤写している(292a10)。

かず、きちんと（八）斎戒をまもり、慈しみの心をいだいて精進し、愛欲を断じ、阿弥陀仏国に生まれることを念じ³³⁾、一日一夜絶えまなく（そのことを思念するならば）、その人たちはこの世で、（第一種の人々と）同じく横になって休んでいると夢の中で阿弥陀仏を見る。その人たちの寿命が尽きようとするときに、³⁴⁾ 阿弥陀仏はすぐさま幻相を現し、その人たちに阿弥陀仏とその国土を自分の目で見させる。（彼らが）阿弥陀仏国に到達すれば、智慧と勇敢さを得ることができる。」

（第二輩のうち、疑念をもつ者）

³⁵⁾ 仏は仰った。

「彼らはこのように布施を行うのだが、その彼らがもし後になって後悔し³⁶⁾、疑念を抱き、“布施をして善行をすれば後の世でその果報を得る”ということ信じなくなり、阿弥陀仏国の存在を疑い、その国に生まれるということ信じなくなるとしても、彼らがそれでもやはり³⁷⁾ 絶えず（阿弥陀仏を）念じ、信じたり信じなかったりして³⁸⁾、意志が定まらず（310b）、集中できなくても³⁹⁾、⁴⁰⁾ それでも自分の立派な願いを本に据えれば、⁴¹⁾ やはり（阿弥陀仏国に）生まれることができる。その人たちが病気で寿命が尽きようとするとき、阿弥陀仏はその化身を現し⁴²⁾、彼らに自分の

33) 念欲 類義の字を重ねた表現。翻訳仏典から見える。本経の他の箇所にも、「断愛欲、齋戒清淨、一心念欲生我國」(301c1)、「當一心念欲往生阿彌陀佛國」(310c14)などに見える。

34) 阿彌陀佛即化、令其人目自見阿彌陀佛及其國土 『平等覺經』ほぼ同じ(292a14)、その他の諸本には「阿彌陀佛が化身を現す」とある。

35) 以下の部分(310a25-c9)、『平等覺經』にのみ対応文がある(292a16-b28; 香川 1984: 251を参照)。「第二輩」に関する補足的な、しかし詳細な説明になっている。同様の補足説明は「第三輩」にも見られる(注 [83])。これらは、五悪段同様、後から付加された部分と考えられる。

36) 中悔 途中で悔やむこと。HD. 1. 603aには漢代、王充『論衡』などの例が挙げられている。

37) 續 「それでもやはり」の意味。本経に類出する。ZHYL. 415 (『義足經』・『生經』などの例); Krsh (1998). 514 (『正法華經』の例); Hu. 86-87 (『道行般若經』・『傷寒論』などの例)を参照。

38) 暫信暫不信 「暫……暫……」は辞書にはないが、「乍……乍……」(cf. GHX. 818)と同様、「～したかと思うと、次には～している」「～したり、～したり」の意味。

39) 無所專據 「專據」は「独占する」の意味で辞書に採られている。HD. 2. 1278aには『後漢書』などの用例が挙げられている。

40) 續其善願爲本 この「續」も「それでもやはり」の意味であろう。注(37)参照。『平等覺經』は「續結其善願、爲(←名)本」(292a20; 「それでも立派な願いを立てて本に据えれば」?)とする。要検討。

41) 故得往生 この「故」は「やはり、なお」(=猶)の意味。訳注(五)注(52)を参照。『平等覺經』は「續得往生」(292a20)とする。「故」と「續」は同義。

42) 化作形像 「化作」は、仏典では Skt. *nir√mā* (化作する)の訳。「形像」は、HD. 3. 1116bには『東觀漢記』・『顔氏家訓』などの例が挙げられている。Krsh (1998). 507; /

目で見させる。彼らにはもう何も言う力がない。ただ心で飛び上がらんばかりに喜び、次のように考える。⁴³⁾『おおいに(八) 齋戒をまもり善行をなすことを知らなかったことを懺悔する。今まさに阿彌陀国に生まれようとしている』と。彼らは心で過ちを懺悔する⁴⁴⁾。過ちを懺悔すれば、(過ちの報いは)少しは軽くなるが(?)⁴⁵⁾、もはや手遅れ。彼らは寿命が尽きてすぐに阿彌陀仏の国に生まれるが、阿彌陀仏のもとには近づけない。すると途上で阿彌陀仏国の端にある⁴⁶⁾、⁴⁷⁾自然の七宝でできた城を見て、大いに歓喜し、そのまま⁴⁸⁾その城に留まる。すぐに七宝でできた池(に生える)蓮の花のなかにすっと生じ、身体を得、自然に成長する。城に住み、⁴⁹⁾そこに五百年間(留まる)。その城は、横も縦もそれぞれ二千里ある。城の中には、七宝でできた住まいがあり、住まいの外と内には七宝でできた浴池がある⁵⁰⁾。浴池の中に

↘ Krsh (2001). 309も参照。

- 43) **我悔不知益齋戒作善。今當往生阿彌陀佛國** あるいは「おおいに齋戒をまもり善行をなせば、現世で当然阿彌陀仏国に生まれるということを知らなかったことを懺悔する」か。第三輩に関して「我悔不知益作諸善。今當往生阿彌陀佛國」(310c21)と類似の文がある。
- 44) **悔過** 「過ちを悔いる。懺悔する」。仏典以前から見える表現。HD. 7. 548aには「孟子・万章上」などの例が挙げられている。
- 45) **小差少** 「差」(chāi)は病気が癒えること。「小差」は「病気が少し良くなる」の意味で、HD. 2. 1613aは『三国志』などの例を挙げている。辞書には採られていないが「差少」も同じ意味。例えば、『大智度論』大正蔵第25巻、415a19「譬人有瘡、良藥塗之、其痛差少」、また『抱朴子内篇・雜應』「諸曾斷穀積久者云：『差少病痛、勝於食穀時』」。ここでは「小差少」で「病気が少し癒える」かあるいは「(過ちの報いは)少しは軽くなる」の意味であろうか。『平等覺經』は「過差少」(292a25)と変え、それを踏まえた王日休校輯『大阿彌陀經』には「其過差少」(339a5)とある。また本経で、第三輩に関して「悔過者、差減少。悔無所復及」(310c23)と類似の文があり、その文の『平等覺經』の対応箇所には「悔過者、過差減少、悔者無所復及」(292c13)とある。
- 46) **阿彌陀佛國界邊** 「國界」は「国」という意味で、安世高訳『雜阿含經』「我當離是國界。汝隨我去。」(大正蔵第2巻、496a20; この経が安世高訳であることは、Paul Harrison, "Another Addition to the An Shigao Corpus?: Preliminary Notes on an Early Chinese *Samyuktāgama* Translation," 『櫻部建先生喜寿記念論集 初期仏教からアビダルマへ』京都2002年 [平楽寺書店], pp. 1-32を参照)や支婁迦讖訳『道行般若經』「我般泥洹後都盧三千大千國界、其中人民汝悉教入經法中」(大正蔵第8巻、478a15)に出る。Krsh (2001). 111には『妙法蓮華經』の例を多数挙げた。しかし、ここではおそらく、「阿彌陀仏国の界邊」と切るべきであろう。「界邊」は同義語を重ねた表現で、「邊界」に同じく、「辺地、境界」の意味。HD. 7. 1319aには史記の例を挙げている。
- 47) **自然七寶城中、心便大歡喜** 『平等覺經』は「自然七寶城、心中便大歡喜」(292a27)とする。後者の方が分かりやすい。後に、「第三輩」に関する段で、本経に「便道見二千里七寶城中、心獨歡喜」(310c25)とあるところ、『平等覺經』はやはり「便道見二千里七寶城、心中獨歡喜」(292c15)としている。
- 48) **便** 『平等覺經』は「道」(292a28)とするが、誤写であろう。
- 49) **於是間五百歲** 「是間」は「そこ」の意味。「彼間」「此間」と同じく漢訳仏典から見える表現。Hu. 114-115参照。
- 50) **城中亦有七寶舍宅。〈舍宅〉中、外内皆有七寶浴池** 二番目の「舍宅」はhaplography(重字脱落)で落ちたと思われるので、補う。『平等覺經』に「城中亦有七寶舍宅。舍宅中自然内外皆有七寶浴池」(292b1)とあるのを参照。本経でも前に「諸菩薩・阿羅漢所居舍宅中、内外處處、皆復有自然流泉・浴池」(304a11)、「講堂・精舍所居處處舍宅中、内外浴池」

は自然の香りのある花がある⁵¹⁾。⁵²⁾ 浴池の周辺には七宝樹がいくつもの列に並んでいて、(それらは) 様々な音色⁵³⁾ を発している。彼らが食事をしたいと思えば、目の前に自然に食事が現れる。⁵⁴⁾ 様々な味の食べ物・飲み物が思いのままに手に入り、思いのままにやってくる。彼らは城の中で喜びを享受する。その城では(天界の下から) 第二番目の切利天の様に自在に物が生じる⁵⁵⁾。この様ではあるが、⁵⁶⁾ 彼らはその城から出ることはいできないし、また阿弥陀仏を見ることができない。ただその光明を見て、後悔しつつ(も)⁵⁷⁾、飛び上がらんばかりに喜ぶだけである。また(その) 教え⁵⁸⁾ を聞くことができないし、比丘たちを見ることができないし、また阿弥陀仏国の菩薩・阿羅漢がどのような姿をしているのか⁵⁹⁾ を見て知ることができない。⁶⁰⁾ 彼らはこのように苦しむが、それはちょっとした罰に他ならない。とはいえ、仏がこのように(苦しませる) わけではない。自分で行った行為によって自然にこうな

、上、皆有七寶樹」(305a5)、「阿彌陀佛當講堂精舍中，内外七寶浴池……及諸菩薩・阿羅漢七寶舍宅中，内外七寶浴池……」(305b12f.)と類似の表現があった。

- 51) 自然香華 諸版本に「自然華香」とあるのを改める。『平等覺經』には「自然華」(292b3)とある。また本経でも前に「阿彌陀佛及諸菩薩・阿羅漢浴池中水皆清香潔，池中皆有香華」(304b8)とあったのを参照。
- 52) 繞浴池上亦有七寶樹重行，亦皆復作五音聲 「繞浴池上」は「池のぐりには」の意味。訳注(三)注(87)を参照。前に「阿彌陀佛當講堂精舍中，内外七寶浴池繞邊上諸七寶樹，及諸菩薩・阿羅漢七寶舍宅中，内外七寶浴池繞池邊諸七寶樹數千百重行，皆各如是。各自作五音聲，音聲甚好無比也」(305b12f.)と類似の表現が出た(訳注[三]，143頁)。
- 53) 五音聲 訳注(三)注(18)を参照。
- 54) 具百味飲食，在所欲得，應意皆至 『平等覺經』には「具百味食，在所欲得」(292b5)とある。前に「百味飯食，意欲有所得，即自然在前」(303c5)と類似の表現が出た(訳注[二]，101-102頁)。「在所欲得」は訳注(五)注(5)を参照。「應意」は「隨意」に同じ。
- 55) 其城中比如第二切利天上自然之物 前に「比如第六天上自然之物，恣若自然，即皆隨意」(303c7)という類似した表現が出た(訳注[二]注[60]を参照)。「第三輩」に関する部分でも同様の表現が出る。注(89)参照。「切利天」は三十三天のこと。訳注(三)注(92)を参照。
- 56) 其人城中不能得出，復不能得見阿彌陀佛。……亦復不能得聞經，亦復不能得見諸比丘僧，亦復不能得見知阿彌陀佛國中諸菩薩・阿羅漢狀貌何等類 ここには「能得」という類義字を重ねた表現が頻出する。訳注(三)注(45)を参照。
- 57) 心自悔責 「悔責」は辞書に採られていないが、仏典には頻出する。
- 58) 經 訳注(一)注(19)を参照。
- 59) 狀貌何等類 「何等」は「なに」の意味。訳注(五)注(127)を参照。「類」も「かたち、すがた」の意味(HD. 12. 353ab [5]参照)。
- 60) 其人愁苦如是比，而(←如)小適耳 「如是比」は「このように」の意味。支婁迦識識から見える。本経以外にも、例えば『道行般若經』「用是故，怛薩阿竭法如是比，不可計，不可稱，無有邊」(大正蔵第8巻，451a7)。また，Krsh (1998). 354. 如此比；356. 如是……比；357. 如是比者を参照。「如」と「而」との交替については，訳注(一)注(24)，訳注(二)注(76)，訳注(五)注(23)を参照。「適」は「謫」「譴」と同じで「責める；ばつ、懲罰」の意味(HD. 10. 1162a. 適⁴⁾)。この一文、『平等覺經』には「其人苦(←若)如是比，而小適耳」(292b11)，王日休校輯『大阿彌陀經』には「以此爲苦，示其小謫」(339a10)とある。

ったのだ。(彼らは) みな心では道(さと)り⁶¹⁾ へ向かっていたのに、この城に入り込んだ。彼らは、その前世で⁶²⁾ 道を求めていたとき、⁶³⁾ 思っていることと言うことが矛盾していて、言葉と考えに誠実さがなく、仏の教えを疑い、またそれを信頼⁶⁴⁾ しなかったのだから、悪い境涯に落ちるのが当然なのだが、阿弥陀仏が哀れんで、超人的な力で彼らを(自分の国へと)引き寄せてくれたのだ⁶⁵⁾。彼らは城の中で五百年過ごした後やっとそこから出て、阿弥陀仏のもとへ行くことができる。(しかし)教えを聞いても、理解できず⁶⁶⁾、また菩薩・阿羅漢・比丘たちの中に留まることはできず、教えを聴き終われば去る。⁶⁷⁾ 彼らの住居は地上にある。住居を思いのままに高く大きく、空中に浮かばせることはできない。また阿弥陀仏からとても(310c)遠く、阿弥陀仏に近づく⁶⁸⁾ ことができない。

彼らは智慧が少なく、また教えをあまり知らず、(教えを)喜ばず、はっきりと理解しない。長い時間がたてば彼らも智慧をつけ教えをはっきりと理解し、賢く強く⁶⁹⁾ 勇敢になり、(教えを)喜ぶようになるはずだ。⁷⁰⁾ 上述の第一種の人々よりは一段劣るが似たようになるはずだ。なぜこうなるのか。彼らは前世、過去世で⁷¹⁾ 道を求めていた時に、あまり(八)齋戒⁷²⁾をまもらず、教えを守らず⁷³⁾、疑い深く⁷⁴⁾、

61) 道 ここでは「さとり」あるいは「覚りあるいは涅槃へいたる道、修行」の意味。訳注(一)注(23)を参照。

62) 宿命 訳注(一)注(96)を参照。

63) 心口各異、言念無誠信 五悪段にも「心口各異、言念無實」(314a4)と類似の表現が出る。

64) 信向 「信頼する」の意味。HD. 1. 1417bには『漢書』・『論衡』などの例が挙げられている。経末にも同じ表現が出る。「心中狐疑、不信向爾(=耳)」(317c2)。

65) 爾 「爾」は「耳」に通じる。本経でも高麗蔵は「爾」にするが、宮内庁書陵部本・資福蔵・磧砂蔵などには「耳」とある。『平等覚経』も「耳」(292b16)とする。

66) 開解 訳注(一)注(5)を参照。

67) 所居處舍宅在地。不能令舍宅隨意高大在虚空中 本経の308a20f。(訳注[五]、86頁)によれば、阿弥陀仏国では、菩薩・阿羅漢の前世の功德に応じて、住居が空中にあったり、地上にあったりし、また住居を思いのままにできる者と出来ない者がいるという。

68) 近附 同義語を重ねた表現で支婁迦讖訳から見える。その『道行般若経』「是菩薩、和夷羅洹化諸鬼神、隨後、亦不敢近附」(大正蔵第8巻、455b28f.)。

69) 明健 辞書に採られていない表現。

70) 次當復如上第一輩 『平等覚経』も同じ(292b23)。「次」は「～に次ぐ、～より劣る」の意味であろう。後に「其人久久亦當智慧開解、知經勇猛、心當歡樂、次如上第一輩也」(311a5f.)、「所居七寶舍宅自在意所欲作爲、可次如上第一輩」(311b12f.)という類似の表現が出る。

71) 前世宿命 「前世」と「宿命」は同義。訳注(二)注(4)を参照。

72) 齋戒 注(10)を参照。

73) 毀失經法 「毀失」は辞書に採られていないが、仏典には頻出する。本経でも後に「若曹當如佛法持之、無得毀失」(317c7)と出る。『平等覚経』は「虧失經法」(292b25)に変えている。「經法」は訳注(一)注(106)を参照。

74) 意志狐疑 『平等覚経』には「心意狐疑」(292b25)とある。

仏の言葉を信じず、仏の教えが奥深いということ信じず、“布施をして善行をすれば後の世でその果報を得る”ということ信じなかったために他ならない⁷⁵⁾。また、途中で後悔し、“阿弥陀仏国に生まれる”ということ信じなくなり、功德を積むことに熱心でなくなったせいでもある。これらのせいに他ならない⁷⁶⁾。以上が、第二種、中級の人々である。」

(第三輩)

⁷⁷⁾ 仏は仰った。

「第三種の人々とは（次の様である）。人々が、阿弥陀仏の国に生まれたいと願いつつも、もし、施せる⁷⁸⁾物が何もなく、また香を焚き、花を散らし、灯火を燃やし、様々な綾絹を懸け、仏塔を建て⁷⁹⁾、沙門たちに食事を与えることができないならば、愛欲を断じ、欲望をなくし、⁸⁰⁾ 教えを得たらすぐさま慈しみの心をいだいて精進し、怒りを抱かず、きちんと（八）齋戒⁸¹⁾をまもるべきだ。このような法（を行う者）が、ひたすら阿弥陀仏国に生まれることを念じ⁸²⁾、十日十夜絶えまなく（そのことを思念するならば）、寿命が尽きるとすぐに阿弥陀仏国に生まれ、尊敬もされ、智慧と勇敢さをも得ることができる。」

(第三輩のうち、疑念をもつ者)

⁸³⁾ 仏は仰った。

「彼らがこれらをなして後、もし後悔し、疑念を抱き、“善行をすれば後の世でその果報を得る”ということ信じなくなり、阿弥陀仏国に生まれるということ信じなくなるとしても、彼らはそれでもやはり⁸⁴⁾（阿弥陀仏国に）生まれることができる。そ

75) 坐 「其人但坐前世宿命求道時……」の「坐」（～のせいで、～によって）はここまで掛かると解釈した。訳注（三）注（48）を参照。

76) 用是故爾 『平等覚経』には「用是故」（292b28）とある。「用……故」で原因・理由を表すのは、仏典特有の用法である。Krsh（1998）.551を参照。「爾」は「耳」に同じ。高麗蔵以外は「耳」にする。

77) 以下の部分、諸本との対照は、香川 1984：252-253を参照。

78) 分檀布施 注（26）を参照。

79) 作佛寺起塔 注（31）を参照。

80) 得経、疾慈心精進 『平等覚経』には「慈心精進」（292c3）とある。

81) 齋戒 注（10）を参照。

82) 念欲 注（33）を参照。

83) 以下の部分（310c16-311a10）、『平等覚経』にのみ対応文がある（292c6-29；香川 1984：253を参照）。「第三輩」に関する補足的な、しかし詳細な説明になっており、上記「第二輩」の補足説明（注 [35]）や五悪段同様、後から付加された部分と考えられる。

84) 續 注（37）を参照。

の人たちが病気で寿命が尽きようとするとき、阿弥陀仏は横になって休んでいる彼らに夢の中で阿弥陀仏の国土を見せる。(彼らは)とても喜び、次のように考える。⁸⁵⁾『私はおおいに善行をなすことを知らなかったことを懺悔する。今まさに阿弥陀仏国に生まれようとしている』と。彼らにはもう何も言う力がなく、ただこのように念じるだけ。彼らは過ちを懺悔する。過ちを懺悔すれば、(過ちの報いは)やや軽くなるが⁸⁶⁾、懺悔してももはや手遅れ。彼らは寿命が尽きてすぐに阿弥陀仏の国に生まれるが、前には進めない。⁸⁷⁾すると途上で(横・縦)二千里ある、七宝でできた城を見て、とても喜び⁸⁸⁾、そのままそこに留まる。(彼ら)もまた七宝でできた池(に生える)蓮の花のなかにすっと生じ、自然に身体を得、成長する。その城もまた前述の城と同様で、(天界の下から)第二番目の忉利天の様に自在に物が生じる⁸⁹⁾。彼らもまた城の中で五百年過ごした後やっとそこから出ることができる。阿弥陀仏のもとへ行き(311a)、大変喜ぶ。(しかし)教えを聞いても、理解できず、楽しくもならない。彼らは智慧が少なく、また教えをあまり知らない。⁹⁰⁾彼らの住居は地上にある。住居を思いのままに高く大きく、空中に浮かばせることはできない。また阿弥陀仏からとても遠く、阿弥陀仏に近づく⁹¹⁾ことができないことも、第二種、中級の人々の中の疑い深い人たちの場合と同様だ。長い時間がたてば彼らも智慧をつけ、教えをはっきりと理解し、勇敢になり、(教えを)喜ぶようになるはずだ。⁹²⁾上述の第一種の人々よりは一段劣るが似たようになる。なぜこうなるかという、(彼らは)みな前世、過去世で道を求めていた時に、途中で後悔し、(仏道に)疑念を抱き、信じたり信じなかつたりして⁹³⁾、“善行をすればその果報を得る”ということ信じなかつたために⁹⁴⁾、みな当然こうなるのだ。⁹⁵⁾それぞれの功德がすくい上げるかどうかによ

85) 我悔不知益作諸善。今當往生阿彌陀佛國 あるいは「おおいに善行をなせば、現世で当然阿弥陀仏国に生まれるということを知らなかったことを懺悔する」か。注(43)を参照。

86) 差減少 注(45)を参照。

87) 便道見二千里七寶城中、心獨歡喜 『平等覺經』は「便道見二千里七寶城、心中獨歡喜」(292c15)としている。これの方が分かりやすい。注(47)を参照。

88) 心獨歡喜 「第二輩」に関する記述の対応箇所では、「心便大歡喜」(310b8)とあった。この「獨」は「とても、非常に」の意味。WCH. 49, Jiang. 331, ZXYL. 152-153, GHX. 107を参照。

89) 比如第二忉利天上自然之物 注(55)を参照。

90) 所居舍宅在地、不能令舍宅隨意高大在虛空中 注(67)を参照。

91) 近附 注(68)を参照。

92) 次如上第一輩也 『平等覺經』も同じ(292c25)。注(70)を参照。

93) 暫信暫不信 注(38)を参照。

94) 坐 「其人但坐前世宿命求道時……」の「坐」(～のせいで、～によって)はここまで掛かると解釈した。注(75)を参照。

95) 隨其功德有所鉉不鉉、各自然趣向 「鉉」は鼎や鍋などの「つる」。「弦」に通じ、ノ

って、それぞれ行き先が決まるのだが、教えを説き仏道を行うことは⁹⁶⁾、(この点で他の)億万のことはるかに卓越している⁹⁷⁾。(以上が第三種の人々である。)]

(阿弥陀仏国に生まれた者)

⁹⁸⁾ 仏は仰った。

「菩薩道を行おうと願って、阿弥陀仏国に生まれる人々は、当然、⁹⁹⁾ 後にみな不退転の菩薩になる。¹⁰⁰⁾ 不退転の菩薩は当然みな三十二の身体的特徴と紫磨金の色(の肌)と八十の(身体的)美点¹⁰¹⁾をもっている。¹⁰²⁾ (彼らは)みな佛になり、願い通り、望み通り¹⁰³⁾、他方¹⁰⁴⁾の仏国で仏となり、¹⁰⁵⁾ 決して二度と地獄・鳥獸・餓鬼には生まれぬ。

¹⁰⁶⁾ さとりを求め精進する度合いによって、遅い早いの違いはあるが、到達点はみな同じ。¹⁰⁷⁾ たゆまずさとりを求め続ければ、その願いに違わず、必ず到達できるは

ゝる。ここでの意味はよく分からない。一往、「つる」の様に「持ち上げる。引き上げる」という意味と考えたが、疑わしい。玄応『一切経音義』には「所眩」。玄相反。『蒼頡篇』云：眩，惑也。又視不明也。或作炫。經文從玄，作“鉉”，非也。舊『音義』訓爲繫，非經義也」(大正藏第54巻，405c13)とあり、「眩」に読みかえようとするが、これも意味が通らない。『平等覺經』には「隨其功德有鉉不鉉，各自然趣向」とあり(292c28)，それに対して同じ玄応『一切経音義』は「“有鉉”。玄犬反。王弼注『易』云：“耳空，以待鉉”。『桂苑珠叢』云：“鉉鼎繫也。鼎耳也。”」と述べている(405a13)。本經のこの部分で述べられていることは、後に(314c13)「殃咎引牽，當値相得，自然趣向，受過謫罰」(罪が引き寄せ、ぴったり相応すれば、人々は自ずとそちらへ向かい、過ちの懲罰を受けるのだ)と悪業に関して言われているのと対をなしている。この一文の「引牽」と問題の「鉉」が対応しているように思われる。

96) 説經行道 訳注(一)注(85)を参照。

97) 卓億萬，超絶不相及 宮内庁書陵部本・資福藏・磧砂藏などには「百千億萬，……」とあるが(房山石經はこの部分破損)，後から改変したもの。『平等覺經』にも「卓億(←徳)萬，殊超不相及」(292c28)とある。

98) 以下の部分，諸本との対照は，香川 1984：278-279を参照。

99) 阿弥陀仏国に生まれた者が不退転の菩薩になることは，本經の第七願で誓われている。

100) 本經の第十五願(『無量壽經』の第三願，第二十一願に対応する)が成就した様を描いている。

101) 三十二相・紫磨金色・八十種好 訳注(一)注(81)，(82)を参照。

102) 以下の部分，諸本との対照は，香川 1984：280-281を参照。本經の第八願(『無量壽經』の第二願に対応する)が成就した様を描いている。

103) 隨所願，在所求欲 「在所求欲」と「隨所願」は同義。「在所～」に関しては，注(17)および訳注(五)注(5)，(63)を参照。『平等覺經』では「隨心所願，在欲」と改められているが(293a3)，これでは分かりにくい。

104) 他方 『平等覺經』には「何方」(293a3)とあるが，誤り。

105) 終不復更泥梨・禽獸・薜荔 訳注(一)注(54)を参照。

106) 隨其精進求道，早晚之，事同等爾 意味が明確でない。要検討。高麗藏以外には「爾」の代わりに「耳」とある。『平等覺經』には「隨其精進求道，早晚之，事事同等耳」(293a4f)とある。

107) 求道不休，會當得之，不失其所欲願也 本經の始めて，樓夷亘羅仏(世自在王仏)は曇摩迦菩薩(法藏菩薩)に同様の教えを語っている。「求索精進，不休止，會當得心中」

ずだ。』

（第三輩の補足説明）（一）

¹⁰⁸⁾ 仏は阿逸菩薩などと神々・帝王・人々に仰った。

「私はおまえたち皆に言う。阿弥陀仏国に生まれたいと思う者は、精進や禪定を大いにしたり、教えに基づく戒を守ることができなくても、少なくとも（次の）善業だけはなさねばならぬ¹⁰⁹⁾。（すなわち）、¹¹⁰⁾ 一、殺生をしてはならない；二、盗みをしてはならない；三、他人の婦女と淫らな関係をもち姦通してはならない；四、騙してはならない¹¹¹⁾；五、酒を飲んでほならない；六、二枚舌を使ってほならない；七、粗悪なことを言っほならない；八、うそを言っほならない；九、嫉妬してほならない；十、貪欲¹¹²⁾ であっほならない。¹¹³⁾ 物惜しみ¹¹⁴⁾ してほならない。怒っほならない。愚かであっほならない。欲望にまかせて享受してほならない¹¹⁵⁾。途中で悔やんでほならない。疑い深くてほいけない。（親に）孝行で従順であるべきだ。まごころと誠実さを実践すべきだ。仏の教えの奥深い言葉を信じるべきだ。善行をすれば後の世でその果報を得るといふことを信じるべきだ。このようにこれらの法をきちんとして¹¹⁶⁾ 守れば、願ひ通りに¹¹⁷⁾、阿弥陀仏国に生まれることができる。少なくとも¹¹⁸⁾ ひたすらに清らかに（八）齋戒をまもり¹¹⁹⁾（311b）、昼も夜も絶えず、ひたす

ゝ 所欲願爾」（301a6f.；訳注〔一〕、140頁）。

- 108) 以下の部分（311a18-b2）、『平等覺經』にのみ対応文がある（293a6-20；香川 1984：301を参照）。この部分、再び、「第三輩」に関して、補足的な説明をしているようだ。香川博士（1984：301）が「五惡段」の一部と考えるのは、誤り。注（123）参照。
- 109) 大要當作善 この「大要」は、後に出る「至要當齋戒一心清淨、晝夜常念欲往生阿彌陀佛國、十日十夜不斷絶、我皆慈哀之、悉令生阿彌陀佛國」（311a29f.）の「至要」と同じく、「これだけはといふ大切なこと、肝心なこと」の意味であろうか。「要當」（～すべし）といふ表現もあるが（HD. 8. 760b. 『後漢書』など；GHX. 681-682. 『三國志』、『世説新語』など）、ここはその例ではないだろう。要検討。
- 110) 以下に挙げられている十善は、普通の十善のリストとはやや異なる。普通は、不殺生・不偷盜・不邪婬・不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見。ここでは「不綺語」「不瞋恚」「不邪見」の代わりに「四者不得調欺」「五者不得飲酒」「九者不得嫉妬」が入っている。
- 111) 調欺 HD. 11. 307a には漢代、王符『潜夫論』の例が挙げられている。
- 112) 貪饜 類義字を重ねた表現。HD. 10. 111b には唐宋代の例が挙げられている。
- 113) 以下の三項目は、貪・瞋・痴の三毒に対応。
- 114) 慳惜 類義字を重ねた表現。辞書には採られていないが、仏典には類出する。
- 115) 嗜欲 食べたり、見たり、聞いたりしたいといふ欲望。HD. 3. 456a には『荀子』などの例が挙げられている。
- 116) 不虧失 「虧失」は類義字を重ねた表現。HD. 8. 851b には『北齊書』『隋書』などの例が挙げられている。
- 117) 在心所願 訳注（一）注（55）を参照。
- 118) 至要 「これだけはといふ大切なこと、肝心なこと」の意味であろうか。注（109）を参照。

らの阿弥陀仏国に生まれたいと念ぜよ¹²⁰⁾。十日十夜絶えまなく（そのことを思念するならば）、私（！）は¹²¹⁾ 彼らをみな哀れんで¹²²⁾、すべて阿弥陀仏国に生まれさせる。」

（第三輩の補足説明）（二）

¹²³⁾ 仏は仰った。

「世間の人々は賢人たちに倣い（その境地に）達したいと願い¹²⁴⁾、家にいながら善行や仏道を修めるが、家族とともに居るので、愛情¹²⁵⁾・愛欲から離れられず、憂い・苦しみも多く¹²⁶⁾、家庭の事柄にせきたてられていて¹²⁷⁾、ひたすらに清らかに本格的な（八）齋戒をする時間がない。家を捨て、欲を捨てることはできないが、暇なときに、¹²⁸⁾ 心をきちんとただし、思念と身体で善行をなせ。¹²⁹⁾ 十日十夜ひたすら道を修めれば、とりわけ立派だ¹³⁰⁾。（しかし）もしこう出来ないときは、考えて、よくよく比べてみよ¹³¹⁾。度脱したいなら¹³²⁾、最低でも（？）¹³³⁾、雑念と憂いを捨てよ。家

119) 齋戒一心清淨　すぐ後に出る「居家修善爲道者、……憂念苦多、家事忽務、不暇大齋一心清淨」(311b3f.)、「斷於愛欲、一心齋戒清淨、至意念生阿彌陀佛國」(311b9f.) という表現を参照。「齋戒」に関しては、注(10)を参照。

120) 念欲　注(33)を参照。

121) ここで、阿弥陀仏ではなく、「我」すなわち釈尊が哀れんで阿弥陀仏国に生まれさせるというのは、本經の他の部分と矛盾しているし、内容的におかしい。この部分が後からの付加ということを示す一文だ。

122) 慈哀　類義字を重ねた表現。辞書には採られていないが、仏典には類出する。Krsh (1998). 55を参照。

123) 以下の部分(311b3-13)、『平等覺經』にのみ対応文がある(293a20-b2; 香川 1984: 303を参照)。この部分も、「第三輩」に関して、補足的な説明をしているようだ。香川博士(1984: 303)が「五惡段」の一部と考えるのは、誤り。注(108)参照。

124) 欲慕及賢明　「慕及」は「誰かを模範にして、その水準に及ぶ」という意味であろうか。後に「悔者已出、其後當復何益? 但心中悞恨、慕及等爾(v. l. 耳)」(311b28f.)、「見善、誹謗恚之、不肯慕及」(314a20f.)とあるのを参照。

125) 恩好　夫婦・家族・友人などの中の愛情・よしみ。HD. 7. 494bには『風俗通』・『三國志』の例が挙げられている。本經の別の箇所でも「思想・恩好・情欲不離」(312c4)、「斷諸愛欲・恩好」(313b13)、「不念師之恩好」(315a4)の例がある。

126) 憂念苦多　『平等覺經』に「憂念若多」(293a22)とあるのは、誤り。

127) 家事忽務　「忽務」は辞書に採られていない。「あわただしい、忙しい」の意味。本經の別の箇所にも「尊卑上下、豪貴貧富、男女大小、各自忽務」(312c8f.)と出る。『無量壽經』にも「勤苦求欲、轉相欺尠、心勞形困、飲苦食毒、如是忽務、未嘗寧息」(277c9f.)と出る。

128) 自端心意、念身作善　『平等覺經』には「自端正心、意念諸善」(293a23)とある。

129) ここより後、王日休校輯『大阿彌陀經』に「其次齋戒清淨、一心常念阿彌陀佛、欲生其刹、十晝夜不斷絶者、命終必得往生。縱不得晝夜、當絶慮去憂、勿與家事、勿近婦人、端身正心、斷除愛欲、齋戒清淨、志心憶念彼佛、持誦名號、欲生其刹、止一晝夜不絶斷者、命終亦得往生」(337b22f.)とあるのを参照。

130) 專精行道十日十夜者、殊　「殊」は「卓越した」という意味であろうか。要検討。

131) 使不能爾、自思惟、熟技計　難解。「能爾」はあるいは「このように」の意味か、ノ

庭の事柄を考えるな。妻と同衾するな。身と心をきちんとただし、愛欲を断ち、ひたすらに清らかに（八）斎戒を保ち¹³⁴、まごころから阿彌陀仏国に生まれることを念じて、一日一夜絶えまなく（そのことを思念するならば）、寿命が尽きてその国に生まれ、七宝でできた池（に生える）蓮の花のなかにずっと生じ、智慧と勇敢さを得ることができる。（彼らが）住む七宝でできた住居は、彼らの思うがままである¹³⁵。上述の第一種の人々よりは一段劣るが似たようになれる¹³⁶。」

略号表

注で使用した略号は次の通り：

GHX = 『古代漢語虚詞詞典』中国社会科学院語言研究所古代漢語研究室編，北京，1999（商務印書館）。

GY = 楊伯峻・何樂士『古漢語語法及其發展』北京，1992（語文出版社）。

HD = 『漢語大詞典』全13冊，上海，1986-1994（漢語大詞典出版社）。

Hu = 胡敕瑞『《論衡》与東漢佛典詞語比較研究』成都，2002（巴蜀書社）。

Jiang = 蔣紹愚『唐詩語言研究』鄭州，1990（中州古籍出版社）。

Krsh (1998) = *A Glossary of Dharmarākṣa's Translation of the Lotus Sutra* 正法華經詞典, Seishi Karashima, Tokyo 1998, The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica I).

Krsh (2001) = *A Glossary of Kumārajīva's Translation of the Lotus Sutra* 妙法蓮華經詞典, Seishi Karashima, Tokyo 2001, The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica IV).

Skt = Sanskrit

WCH = 江藍生『魏晉南北朝小説詞語匯釋』北京，1988（語文出版社）。

Zhu = 朱慶之『佛典與中古漢語詞彙研究』台北，1992（文津出版社）。

ZHYL = 王雲路・方一新『中古漢語語詞例釋』長春，1992（吉林教育出版社）。

ZXYL = 董志翹・蔡鏡浩『中古虚詞語法例釋』長春，1994（吉林教育出版社）。

香川 1984 = 香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』京都，1984（永田文昌堂）。

、（訳注 [五] 注 [50], [90] を参照）。「投計」（HD. 6. 587a には宋代の例が挙げられている）は、「校計」（HD. 4. 1001b には『三国志』などの例が挙げられている）・「較計」（HD. 9. 1250a には『古詩源』などの例が挙げられている）と同じく、「比較する」の意味。『平等覺經』には「使不能爾，自思惟，熟計」（293a24）とある。

132) 欲度脱身者 「自分を度脱させたいなら」。「度脱」は仏典から見える語。すでに安世高訳から見える。例えば『大安般守意經』大正藏第15卷，163c-13. Krsh (1998). 107, Krsh (2001). 69, 414も参照。

133) 下 この「下」の意味が分からない。『平等覺經』も同じ（293a25）。

134) 一心齋戒清淨 注 (119) を参照。

135) 自在意所欲作爲 上には、「舍宅」に関して、「舍宅即在虚空中，皆自然隨意，在所作為」（308a24f.）、「所居七寶舍宅在虚空中，恣隨其意，在所欲作爲」（310a10f. 注 [17] 参照）などとあった。「自在意所欲作爲」という表現は、本經の別の箇所でも出た「諸佛……自在意所欲作爲，不豫計」（302c28f.；訳注 [二] 注 [6] 参照）。

136) 可次如上第一輩 『平等覺經』も同じ（292b1）。注 (70) を参照。

香川 1993 = 香川孝雄『浄土敎の成立史的研究』東京, 1993 (山喜房佛書林)。

訳注 (一) = 辛嶋静志「『大阿弥陀経』訳注 (一)」『佛敎大学総合研究所紀要』第6号 (1999), pp. 135-150.

訳注 (二) = 辛嶋静志「『大阿弥陀経』訳注 (2)」『佛敎大学総合研究所紀要』第7号 (2000), pp. 95-104.

訳注 (三) = 辛嶋静志「『大阿弥陀経』訳注 (三)」『佛敎大学総合研究所紀要』第8号 (2001), pp. 133-146.

訳注 (四) = 辛嶋静志「『大阿弥陀経』訳注 (四)」『佛敎大学総合研究所紀要』第10号 (2003), pp. 27-34.

訳注 (五) = 辛嶋静志「『大阿弥陀経』訳注 (五)」『佛敎大学総合研究所紀要』第11号 (2004), pp. 77-96.

(平成十六年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (C) (2) による研究成果の一部)